第1421回（3月24日）

タイにおける米生産費調査について

（京都大学農学部）辻　井　　博

最近行なったタイ米作地帯の農村調査の資料をもとにして，タイの農家経営の事例を紹介した。さらに，日本とアメリカとタイについて，その稲作生産費の比較検討を行なった。また，最近の話題として，タイにおけるジャポニカ米の生産可能性についても触れた。

報告者の試算によれば，1984/85年度の時点でタイの籾1トン当たりの生産費は27,023円であるのに対して，アメリカのそれは，カリフォルニア米が39,536円でタイの1.46倍，テキサス米（南ガルフ）が52,156円でタイの1.93倍，さらに日本のそれは353,790円でタイの13.09倍となっている。周知のとおり，タイの稲作は4つの異なった地帯で生産されており．その各々で，生産条件は大きく相違している。最も生産性の高い中央部，比較的条件に恵まれている南部，生産性の低い北部と東北部で，その生産方法もことなり，生産費も大きくばらついている。また乾期作と雨期作との間でもその生産費は大きく異なっている。したがって，全国平均あるいは特定の一地域の生産費の推定値にもとづいて議論することには注意を要する。

タイでこのように生産費が安いのは，主として農薬・肥料を用いない伝統的な農法，つまり自然現象を最大限に有効利用した生産方法によっているためである。

また，北部地域では，もち米の消費量が相対的に多いことも指摘された。現在では，中・短粒種（ジャポニカ米）の生産はほとんどマイナーであるが，日本から技術援助の一貫として持ち込まれた農機具に付着していた短粒種の籾を栽培したところ，生育したので一部でジャポニカ米が出回っていることも最近のニュースとなっている。現在のところ，国際米市場の大部分は長粒種であるため，タイでは，ジャポニカ米の生産にそれほど大きな関心を示していないが，近い将来に，ジャポニカ米の輸入需要が何等かの事情で増大した場合，タイはジャポニカ米を輸出する潜在性を持っているかどうかについて，専門家の間では意見が分かれている。作物技術者の間では，気温が高すぎることや日照時間が適さないため，採算ベースに乗る生産は難しいと主張するが，政策担当者は，香り米と言われるバスマテ米の例を挙げる。つまり，従来，バスマテ米はタイでは生産されていなかったが，国際市場での需要が高まったのを契機に国内生産を開始し，今では，重要な輸出品になっている。したがって需要さえあればジャポニカ米への切り替えもそれほど困難ではないとする。

その他，冒頭において，国際米市場の最近の動向とその特徴についても触れた。つまり'80年代以降，世界的な米過剰の状況にあること，また世界生産量に占める貿易量の比重が他の商品と比べて極めて低いこと，さらにその生産が地理的に一部の地域に偏っていること，その為，国際米価が不安定であること等の点を指摘した。　（文責・加賀爪　優）